様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２６８１

研究課題名（和文）英語スピーキング能力を伸ばす授業法：その指導法と成果の可視化に関する実証的研究

研究課題名（英文）A teaching and learning methodology for improving speaking ability: Three studies exploring methodology and assessment

研究代表者
長崎　睦子（Nagasaki, Mutsuko）

愛媛大学・教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：９０４０６５４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，グローバル化に対応した大学生の英語コミュニケーション能力育成のために，特に共通教育初年次において，その基盤となる基本的スピーキング力を身につけさせる指導法と評価法の確立を目指した。授業ではスピーチ（成果発表）を定期的に行い，授業外ではそのスピーチに向け口頭でリハーサル（練習）をする「スピーチ＆リハーサル」法を用い，リハーサルはスピーキング力を向上させるかどうかを検証していた。その結果，リハーサルをすればするほどスピーキング力が向上することが示された。練習期間が1ヵ月であっても，学習者にとって馴染みのあるタスクでのスピーキング力の向上には，2カ月間と同等の効果があることも分かった。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this research was to develop a teaching and learning method to improve the English speaking ability of first-year Japanese university students by combining a speech in class and oral rehearsals at home. The study also aimed to develop a speaking assessment rubric and establish a reliable and valid assessment method by revising the rubric based on the results. The main research findings were as follows. First, students' individual oral rehearsals promote their noticing second language problems and undertaking self-modification of those problems. Second, the more students orally rehearse, the more their speaking will improve. Third, repeatedly rehearsing for one month is as effective as engaging in the same number of oral rehearsals for two months to promote L2 speaking ability on familiar tasks, while a longer period might be necessary to improve it in unfamiliar tasks.

研究分野：英語教育

キーワード：リハーサル　スピーキング　気づき　ルーブリック評価

１．研究開始当初の背景

グローバル社会で必要な英語コミュニケーション能力の育成には，多量のインプット (聞く, 読む) とアウトプット (話す, 書く) が重要であることは言うまでもない。しかし，日本のような日常生活で英語に触れることがほとんどない環境では，いかに学習者の日常の英語使用の機会を増やすかが大きな課題である。

大学英語クラスにおけるインプットの量を増やす取り組みとしては，ポッドキャストを活用した多聴 (Lauer & Enokida, 2010) や段階別読み物を使用した多読 (酒井 & 神田, 2005) などが実践されている。一方，アウトプットの量を増やす試みとしては，エッセイなどの宿題を通して，多量に書かせる方法がよく用いられている。しかし，英語クラスにおいて，多量に話させる取り組み及びその効果を検証した研究はほとんどない。その理由としては，話すという性質上，会話する相手が必要になるため，ひとりでは実践しにくいという点が挙げられる。また，近年スカイプを利用した英会話サービスがあるが，経費がかかる点や見知らぬ人と話すため安全面に不安があり，一般的な授業では取り入れにくいのが現状である。

では，学習者にスピーキングを多量にさせるためにはどうすればよいのだろうか。

２．研究の目的

本研究では，グローバル化に対応した大学生の英語コミュニケーション能力育成のために，特に共通教育初年次において，その基盤となる基本的スピーキング力を確実に身につけさせる指導法とその効果を測定する評価法を確立する。これらを中心に，下記の 3 つのプロジェクトを行うことを目的とする。

(1)　授業と授業外学習を有機的に結び付けた英語スピーキング能力を育成する指導方法の実践と改善

(2)　スピーキングの評価ルーブリックの作成・実施と，その妥当性・信頼性の向上

(3)　授業期間が異なるクラスでの実践～普遍的な指導法への発展に向けて

３．研究の方法

本事業は，上記 3 つのプロジェクトを遂行するために，国立大学 1 年生の必修英語科目 (スピーキング) クラスの学生を対象に，予備研究を含めて 3 つのクラスルーム・リサーチ (教室研究) を行う。3 つの教室研究を通して，学習者の英語スピーキング力育成のために「スピーチ＆リハーサル法」を提案・実施する。さらに，スピーキング能力評価のためのルーブリックを作成・修正し，信頼性の高い評価法の確立を目指す。

（1）スピーチ＆リハーサル法

大学 1 年生の英語スピーキング・クラスの学生を対象に，リハーサル強制クラスとリハーサル自由クラスに分ける。両クラスの学習者は，学期中に計 8 回，授業にて 2 分間のスピーチを行い，毎回，スピーキング・クラスで使用する教科書の題材から研究者らが選んだトピックについて話す。自宅ではスピーチに向け，原稿を書かずに，5 回以上 (土，日を除いた毎日) 口頭のみのリハーサルを英語で行い，全てのリハーサルを IC レコーダーに録音する。

共通の記録ノートを配布し，録音直後，5 つの観点 ([語彙][発音][流暢さ][内容][文法]) から，リハーサルを通して気づいた点，分からなったこと，調べたことなどを記入してもらう。次に，録音したリハーサルを聞いて，さらに気づいた点があれば記入してもらい，第二言語への気づきを調べる。

リハーサル強制グループは，学期中にひとり 8 回 2 分間のスピーチを行う。スピーチに向け週に 5 回以上 (土日を除いた毎日) リハーサルすることが課題とされる。リハーサル自由グループは，スピーチに向けたリハーサルをするかしないかは自由とされるが，積極的にリハーサルに取り組むよう動機づけを行う。

（2）スピーキング評価ルーブリック

上記 5 観点 ([語彙][発音][流暢さ][内容][文法]) を，それぞれ 5 段階で評価するルーブリックを作成する。実際に評価に活用し，その結果を基に，より妥当性・信頼性の高い評価方法へと修正・改善してく。

（3）3 つ教室研究

3 つの教室研究を通して，「スピーチ・リハーサル」法の効果検証と改善，スピーキング評価ルーブリックの開発・改善を行う。各研究の参加者及び主なリサーチ・クエスチョン (RQ) は次の通りである

予備教室研究 (平成 26 年度 セメスター制)：
参加者：大学 1 年生の英語スピーキング 2 クラスの計 39 名 (リハーサル強制グループ 30 名，リハーサル自由グループ 29 名)
RQ1:スピーキングによるリハーサルは，第二言語 (英語) への気づきや自己修正を促すか
RQ2:スピーキングによるリハーサルは，スピーキング力向上を促すか

教室研究 1 (平成 27 年度 セメスター制)：
参加者：大学 1 年生の英語スピーキング 3 クラスの計 63 名 (リハーサル強制･指導ありグループ 22 名，リハーサル自由・指導ありグループ 21 名，リハーサル自由・指導なしグループ 20 名)
RQ1:スピーキングによるリハーサルは，第二言語 (英語) への気づきや自己修正を促すか
RQ2:スピーキングによるリハーサルは，スピーキング力向上を促すか
RQ3:スピーチの構成に関する指導は，スピーキング力向上を促すか

教室研究 2 (平成 28 年度 クォーター制)：
参加者：大学 1 年生の英語スピーキング 2 クラスの計 53 名 (リハーサル強制・指導ありグループ 26 名，リハーサル自由・指導ありグループ 27 名)
RQ1:約 1 カ月間のリハーサル期間は，スピーキング力向上に効果があるか
RQ2: スピーキングによるリハーサルの期間 (約 2 カ月間と約 1 カ月間) の違いは，スピーキング力向上に影響があるか

４．研究成果

(1) 予備教室研究

RQ1:スピーキングによるリハーサルは，第二言語 (英語) への気づきや自己修正を促すか

学習者 39 名のノートには合計 2,038 の言語項目についての記載があり，8 つのスピーチに向けたリハーサルを通して一人平均 52 の問題に気づいていることが分かった (表 1)。

表 1　記録ノートに書かれた学習者が気づいた言語項目の数と割合

	All Participants (*N* = 39)				RR Group (*n* = 20)				RE Group (*n* = 19)			
	n	%	*M*	*SD*	*n*	%	*M*	*SD*	*n*	%	*M*	*SD*
Vocabulary	704	34.5	18.1	18.6	417	35.5	20.9	18.6	287	33.3	15.1	18.6
Pronunciation	310	15.2	7.9	9.0	167	14.2	8.4	8.7	143	16.6	7.5	11.2
Fluency	326	16.0	8.4	8.1	173	14.7	8.7	6.7	153	17.7	8.1	9.6
Content	424	20.8	10.9	8.8	264	22.4	13.2	8.2	160	18.6	8.4	8.9
Grammar	274	13.4	7.0	8.1	155	13.2	7.8	8.0	119	13.8	6.3	8.3
Total	2038	100.0	52.3	47.7	1176	100.0	59	43.2	862	100.0	45.4	52.4

Note. RR=Rehearsal Required (リハーサル強制)，RE＝Rehearsal Encouraged (リハーサル自由)

記載されていた 2,038 言語項目の内,具体的に何が問題かが記されていた 860 項目を分析したところ,773 項目が学習者によって修正されていた (89.9%)。さらに，無作為に 321 項目を選び，修正された言語項目がどのように解決されたのかを調査した。その結果，321 項目の内，301 項目 (93.8%) が正しく修正され，20 項目 (6.2%) が誤って修正されていたことが分かった (表 2)。正しく修正された 301 項目の内，195 項目 (64.8%) は，その後のクラスでのスピーチでも正しく使えていることが分かった。

表 2 リハーサルを通して修正された言語項目の本番 (スピーチ) での使用

At the rehearsal stage		At the speech stage	Vocabulary		Pronunciation		Grammar		While listening		Total	
			n	%	*n*	%	*n*	%	*n*	%	*n*	%
SNP (*N*=321, 100%)	Correctly solved (*n*=301, 93.8%)	Correctly used	75	70.1	26	45.6	77	65.8	17	85.0	195	64.8
		Incorrectly used	9	8.4	10	17.5	6	5.1	0	0	25	8.3
		Not used	23	21.5	21	36.8	34	29.1	3	15.0	81	26.9
		Total	107	100.0	57	100.0	117	100.0	20	100.0	301	100.0
	Incorrectly solved (*n*=20, 6.2%)	Correctly used	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		Incorrectly used	2	33.3	0	0	10	76.9	1	100.0	13	65.0
		Not used	4	66.6	0	0	3	23.1	0	0	7	35.0
		Total	6	100.0	0	0	13	100.0	1	100.0	20	100.0

これらの結果は，図 1 が示すように，リハーサルは，学習者の言語項目に対する多くの気づき (Step1) や正しい自己修正 (Step2)，正しい本番での使用 (Step3) を促していることを示しており，この一連のプロセスが第二言語習得に貢献していると考えられる。

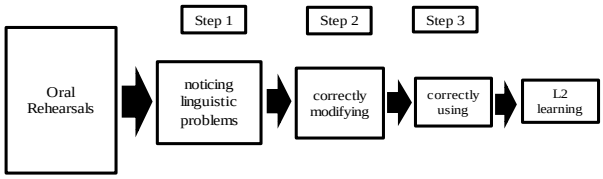

図 1　リハーサルが第二言語学習を促すプロセス

RQ2:スピーキングによるリハーサルは，スピーキング力向上を促すか

スピーキングの事前および事後テストとして，それぞれ 2 種類のスピーキング・テスト (スピーチとナラティブ) を実施した。本研究用に作成した 5 項目 5 スケールからなるルーブリックを用い，2 名の英語ネイティブ話者がスピーチ・テストを，さらに別の 2 名の英語ネイティブ話者がナラティブ・テストを評価し，各学習者の平均点を算出した。その結果，リハーサル強制，自由グループともに点数を伸ばした (表 3，図 2,3)。

表 3　スピーチ・テスト，ナラティブ・テストの平均点

	Speech				Narrative			
	pretest		posttest		pretest		posttest	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
All (*N*=39)	15.6	2.4	17.4	2.2	13.6	2.8	14.4	3.1
RR (*n*=20)	15.7	2.2	18.3	2.0	13.1	2.8	14.2	2.7
RE (*n*=19)	15.5	2.6	16.6	2.1	14.2	2.9	14.7	3.6

Note. RR=Rehearsal Required (リハーサル強制)，RE＝Rehearsal Encouraged (リハーサル自由)．最高点 25. *M*=mean, *SD*=standard deviation

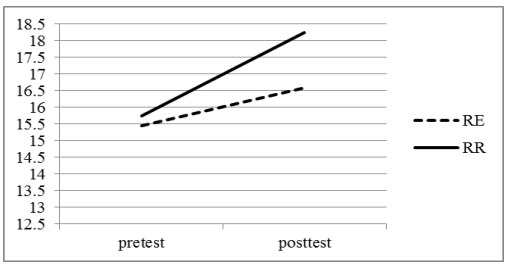

図 2　スピーチ・テスト平均点

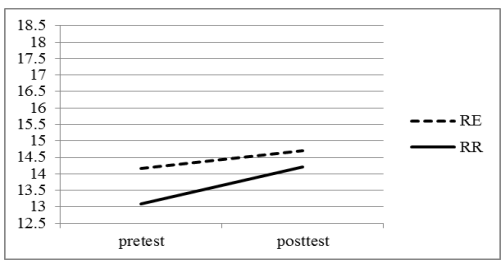

図 3　ナラティブ・テスト平均点

重回帰分析の結果，リハーサルの回数がスピーチ・テストの点数の伸びを予測することが分かった (R^2=.233, β = .55; p < .05) (表 4)。一方，ナラティブ・テストではリハーサルの回数と点数の伸びとの間には関連性はみられなかった。これは，スピーチ・テストにおいては，リハーサルをすればするほど点数が伸びることを示している。

表 4　スピーチ・テストの結果に対する重回帰分析

Independent Variables	Unstandardized Coefficients β	Std. Errors	Standardized Coefficients β	t	Sig.
Class Type	-0.05	0.94	.00	-0.05	0.957
Numbers of Rehearsal	0.1	0.03	.55	2.66	0.011*
Gender	-1.63	1.04	-.28	-1.56	0.308

Note. Class type=リハーサルが強制か自由. *p<.05.

（2）教室研究 1

RQ1:スピーキングによるリハーサルは, 第二言語 (英語) への気づきを促すか

学習者 63 名のノートには合計 2,538 の言語項目についての記載があり，8 つのスピーチに向けたリハーサルを通して一人平均 41 の問題に気づいていることが分かった (表 5)。

表 5　記録ノートに書かれた学習者が気づいた言語項目の数と割合

	All Participants (N = 63)				CR+I Group (n = 22)				FR+I Group (n = 21)				FR–I Group (n = 20)			
	n	%	M	SD	n	%	M	SD	n	%	M	SD	n	%	M	SD
Vocabulary	1077	41.7	17.1	20.3	710	42.1	32.3	23.5	264	40.4	12.6	14.5	103	42.0	5.2	8.4
Pronunciation	426	16.5	6.8	8.8	284	16.9	12.9	10.4	107	16.4	5.1	6.9	35	14.3	1.8	2.7
Fluency	321	12.4	5.1	6.0	215	12.8	9.8	6.5	78	12.0	3.7	4.6	28	11.5	1.4	2.3
Content	448	17.4	7.1	7.3	273	16.2	12.4	8.1	123	18.8	5.9	5.6	52	21.2	2.6	3.5
Grammar	311	12.0	4.9	7.1	203	12.0	9.2	9.4	81	12.4	3.9	4.7	27	11.0	1.3	2.4
Total	2583	100.0	41	45.3	1685	100.0	76.6	49.6	653	100.0	31.3	34.5	245	100.0	12.3	16.7

Note. CR+I=Compulsory Rehearsal with Instruction (リハーサル強制・指導あり), FR+I=Free Rehearsal with Instruction (リハーサル自由・指導あり), FR−I=Free Rehearsal without Instruction (リハーサル自由・指導なし), M=mean; SD=standard deviation.

ノートに記された 2,538 言語項目の内,具体的に何が問題かが記されていた 1,732 項目を分析したところ，1,581 項目 (91.3%) が学習者によって修正されていたことが分かった。さらに, その中から無作為に 541 項目を選び, 修正された言語項目がどのように解決されたのかも調査した。その結果, 541 項目の内, 482 項目 (89.1%) が正しく修正され，さらに正しく修正された 482 項目の内，275 項目 (57.0%) は，その後のクラスでのスピーチでも正しく使えていることが分かった (表 6)。

予備研究結果と同様に，リハーサルは，学習者の第二言語への気づきや自己修正を促し，正しく修正されたことの約 6 割はその後の学習にも結び付いていることが示された。

一方で，誤って修正した項目の 79.7% (表 6) は, クラスのスピーチでも誤って使用していたため，学習者の気づいた項目に対してフィードバックを与えるなど，教師による何らかの介入が必要であろう。

表 6　リハーサルを通して修正された言語項目の本番 (スピーチ) での使用

At the rehearsal stage		At the speech stage	Vocabulary n	Vocabulary %	Pronunciation n	Pronunciation %	Grammar n	Grammar %	While-Listening n	While-Listening %	Total n	Total %
SNPs (N=541, 100%)	Correctly solved (n=482, 89.1%)	Correctly used	105	60.4	39	48.1	94	55.3	37	64.9	275	57.0
		Incorrectly used	34	19.5	13	16.1	14	8.2	4	7.0	65	13.5
		Not used	35	20.1	29	35.8	62	36.5	16	28.1	142	29.5
		Total	174	100.0	81	100.0	170	100.0	57	100.0	482	100.0
	Incorrectly solved (n=59, 10.9%)	Correctly used	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0
		Incorrectly used	23	88.5	0	0.0	18	72.0	6	75.0	47	79.7
		Not used	3	11.5	0	0.0	7	28.0	2	25.0	12	20.3
		Total	26	100.0	0	0.0	25	100.0	8	100.0	59	100.0

RQ2:スピーキングによるリハーサルは, スピーキング力向上を促すか

予備研究と同じ 2 種類のスピーキング・テスト (スピーチとナラティブ) を，実施方法を改善した上で実施した。また，評価ルーブリックも 5 項目 6 スケールに改善し，3 名の教員が (英語ノン・ネイティブ話者 2 名，ネイティブ話者 1 名) が評価し，各学習者の平均点を算出した。その結果,「リハーサル強制・指導あり」,「リハーサル自由・指導あり」,「リハーサル自由・指導なし」の全グループが点数を伸ばした (表 7，図 4, 5)。

表 7　スピーチ・テスト，ナラティブ・テストの平均点

	Speech				Narrative			
	pretest		posttest		pretest		posttest	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
All (N=63)	12.6	2.7	16.0	3.3	13.3	3.0	15.2	3.2
CR+I (n=22)	12.9	3.4	17.5	3.2	14.2	2.5	17.1	2.6
FR+I (n=21)	13.1	2.0	16.7	3.1	14.0	2.2	15.7	2.5
FR–I (n=20)	11.8	2.5	13.7	2.6	11.6	3.5	12.5	2.6

Note. CR+I=Compulsory Rehearsal with Instruction (リハーサル強制・指導あり), FR+I=Free Rehearsal with Instruction (リハーサル自由・指導あり), FR−I=Free Rehearsal without Instruction (リハーサル自由・指導なし), 最高点 30, M=mean, SD=standard deviation

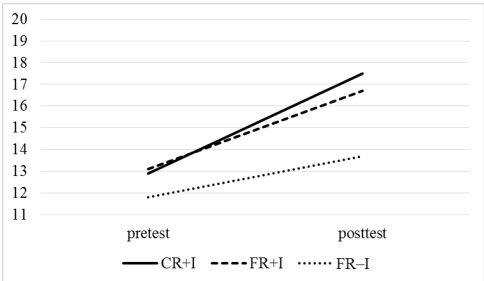

図 4　スピーチ・テスト平均点

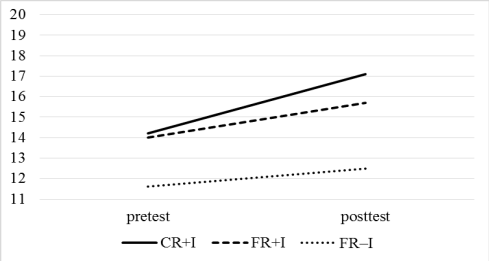

図 5　ナラティブ・テスト平均点

重回帰分析の結果，リハーサルの回数がスピーチ・テストおよびナラティブ・テストの点数の伸びを予測することが分かった (スピーチ：R^2=.233, β = .34; p < .05, ナラティブ：(R^2=.215, β = .42; p < .05) (表 8)。したがって，リハーサルすればするほどスピーチ，ナラティブの両タスクにおける学習者のスピーキング力が向上することが示された。

表 8　スピーチ・テスト，ナラティブ・テスト結果に対する重回帰分析

	Independent Variable	Unstandardized Coefficient *B*	SE	Standardized Coefficient β	*t*	Sig.
Speech Test Score Changes	Class Type	-0.03	0.86	-.01	-0.04	0.971
	Number of Rehearsals	0.05	0.02	.34	2.11	0.038*
	Instruction	1.24	0.74	.23	1.68	0.097
Narrative Test Score Changes	Class Type	-0.03	0.81	-.01	-0.04	0.961
	Number of Rehearsals	0.06	0.02	.42	2.63	0.010*
	Instruction	0.43	0.70	.08	0.61	0.541

Note. Class type=リハーサルが強制か自由，Instruction=指導があるかないか. *p<.05.

RQ3:スピーチの構成に関する指導は, スピーキング力向上を促すか

上記表 8 が示すように, 重回帰分析の結果, スピーチの構成に関する指導と点数の伸びの間には関連性は見られなかった。しかし，指導を受けたグループは，受けなかったグループの約 2 倍のリハーサルを取り組んだことが分かった。

表 9　リハーサルの回数

	Total	*M*	*SD*
All (*N* =63)	1223	19.4	17.5
CR+I (*n* =22)	782	35.5	12.5
FR+I (*n* =21)	300	14.3	16.1
FR-I (*n* =20)	141	7.1	7.1

Note. CR+I=Compulsory Rehearsal with Instruction (リハーサル強制・指導あり), FR+I=Free Rehearsal with Instruction（リハーサル自由・指導あり），FR−I=Free Rehearsal without Instruction (リハーサル自由・指導なし)

（3）教室研究 2

RQ1:約 1 カ月間のリハーサル期間は, スピーキング力向上に効果があるか

クォーター制の導入に伴い，スピーチに向けたリハーサル期間がこれまでの約 2 カ月から，約 1 カ月間となったが，スピーチ・テスト，ナラティブ・テストの両方において，点数の伸びが見られた (表 10, 図 6, 7)。

表 10 スピーチ・テスト，ナラティブ・テストの平均点

	Speech				Narrative			
	pretest		posttest		pretest		posttest	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
All (*N* =53)	12.4	2.8	16.0	3.0	12.6	2.7	14.6	2.6
CR (*n* =26)	11.9	2.8	15.9	2.9	12.9	2.3	15.3	2.3
FR (*n* =27)	12.9	2.6	16.1	3.0	12.3	3.1	13.9	2.7

Note. CR = Compulsory Rehearsal with Instruction (リハーサル強制)，FR =Free Rehearsal (リハーサル自由). 最高点 30, *M*=mean, *SD*=standard deviation.

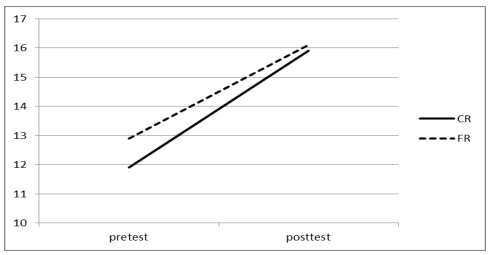

図 6　スピーチ・テスト平均点

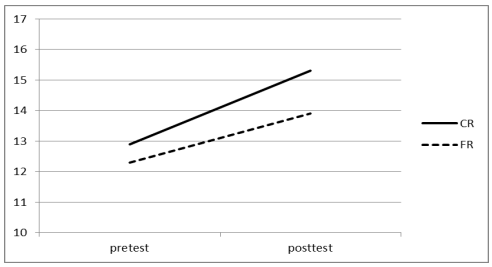

図 7　ナラティブ・テスト平均点

重回帰分析の結果，リハーサルの回数がスピーチ・テストの点数の伸びを予測することが分かった (R^2=.169, β = .64; p < .01) (表 9)が，ナラティブ・テストの点数の伸びとリハーサルの回数との間には関連性はみられなかった。これは，スピーチ・テストにおいては，1 か月間であっても，リハーサルすればするほど点数が伸びる可能性があることを示している。

表 9　スピーチ・テスト，ナラティブ・テスト結果に対する重回帰分析

	Independent Variables	Unstandardized Coefficients *B*	Std. Errors	Standardized Coefficients β	*t*	Sig.
Speech Test Score Changes	Class Type	-1.42	0.93	-.34	-1.53	0.132
	The Number of Rehearsals	0.08	0.03	.64	2.86	0.006**
Narrative Test Score Changes	Class Type	-0.42	0.79	-.12	-0.53	0.598
	The Number of Rehearsals	0.05	0.02	.44	1.92	0.060

Note. Class type=リハーサルが強制か自由. **p<.01.

RQ2:スピーキングによるリハーサルの期間(約 2 カ月間と約 1 カ月間) の違いは，スピーキング力向上に影響をあたえるか

これを調査するために，リハーサル期間が異なる点以外は，基本的に本研究 (研究 2) と同じ条件下で収集された研究 1 のデータと本研究のデータを統合し分析した。

重回帰分析の結果，リハーサル回数がスピーチ・テストおよびナラティブ・テストの点数の伸びを予測することが分かった（スピーチ：R^2=.112, β = .37; p < .01, ナラティブ：(R^2=.155, β = .44; p < .01) (表 10)。一方で，リハーサルの期間が 2 カ月間であるか 1 か月間であるかという点と，テストの点数の伸びとの間に関連性は示されなかった (表 10)。

表 10　研究 1，2 のスピーキング・テスト結果に対する重回帰分析

	Independent Variables	Unstandardized Coefficients *B*	Std. Errors	Standardized Coefficients *β*	*t*	Sig.
Speech Test Score Changes	Class Type	-0.34	0.64	-.01	-0.52	0.600
	The Number of Rehearsals	0.05	0.02	.37	2.64	0.009**
	Rehearsal Period	0.36	0.45	.08	0.79	0.433
Narrative Test Score Changes	Class Type	-0.29	0.56	-.07	-0.52	0.603
	The Number of Rehearsals	0.05	0.02	.44	3.21	0.001**
	Rehearsal Period	0.14	0.40	.03	0.35	0.723

Note. Class type=リハーサルが強制か自由, Rehearsal Period=リハーサル期間が 2 ヵ月間か 1 ヵ月間. **p<.01.

(4)まとめ

予備研究，研究 1，2 より: リハーサルすればするほど，英語スピーキング力が向上する可能性が高いことが示された。

研究 1 より: スピーチの構成に関する指導は，スピーキング力の向上に直接的な効果は見られなかったが，リハーサル回数の増加に貢献していることが分かった。

研究 2 より: 英語スピーキングによるリハーサルは，練習期間が 1 ヵ月であっても，学習者にとって馴染みのあるタスク (本研究ではスピーチ) でのスピーキング力の向上には効果があることが分かった。馴染みのないタスク (本研究ではナラティブ) でのスピーキング力の向上には，リハーサルの回数が同じであっても，より長い期間にわたるリハーサルが必要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① Nagasaki, M., & Orimoto, S. (2016). Effects of oral rehearsal on L2 speaking improvement. *JACET Chugoku-Shikoku Chapter Bulletin, 13*, 53-70.

② Nagasaki, M. (2016). Promoting L2 learning through spoken rehearsal and speech in university English classrooms. *Journal of Faculty and Staff Development in Higher Education, 14,* 1-7.

〔学会発表〕（計　7 件）

1. Nagasaki, M., Orimoto, S., Armitage, K., & Kaneko, I. (2018). Teaching and learning methods to improve speaking ability: Report of the 2016-2017 Kaken (C) Research. *The 16th Ehime University Education Seminar*.

2. Armitage, K., & Nagasaki, M. (2018). The assessment challenges of creative activities. *The 53rd RELC Convention*.

3. Nagasaki, M., Orimoto, S., & Armitage, K. (2017). Is the length of an oral rehearsal period a significant factor in second language speaking improvement? *JACET 56th International Convention, Tokyo*.

4. Nagasaki, M., Orimoto, S., & Armitage, K. (2016). Does oral practice work?: Effects of rehearsal and instruction on second language speaking improvement. *JACET 55th International Convention, Sapporo*.

5. 長崎睦子・折本素 (2016). 「大学英語クラスにおける口頭リハーサルとスピーチの実践」 JACET 2016 中四国春季支部大会 愛媛大学

6. Nagasaki, M., & Orimoto, S. (2015). Effects of spoken rehearsal on L2 learning. *JACET 54th International Convention, Kagoshima*.

7. Nagasaki, M., Orimoto, S., & Kaneko, I. (2015). Promoting EFL learners' speaking ability using rehearsal and developing a meaningful assessment of their speaking. The *AAAL 2015 Annual Conference*, Toronto, Canada.

６．研究組織

(1)研究代表者

長崎　睦子（NAGASAKI, Mutsuko）
愛媛大学　教育･学生支援機構英語教育センター　准教授
研究者番号：90406546

(2)研究分担者

折本　素　(ORIMOTO, Sunao)
愛媛大学　教育・学生支援機構英語教育センター　教授
研究者番号： 20194649

金子　育世 (KANEKO, Ikuyo)
順天堂大学医療看護学部先任准教授
研究者番号： 00360115

(3)連携研究者

クリスティン･アーミテージ (ARMITAGE, Kristin)
愛媛大学　教育・学生支援機構英語教育センター　助教
研究者番号：70765809